

れば普門院の原本の佚亡せる今日にて洞菴先生手録の圖書寮本の本書は極めて精確に原著の面影を傳へたるものにして實に天下の孤本として珍重すべきものである。神田文學士その發見の欣を私するに忍びず認許を得て之を排印し、廣く天下の學徒にその欣を分たれたることは學界の美事として大に感謝せなければならぬ。尙ほ本書は非賣品であるが、希望者には實費一冊金八拾五錢送料貳錢を以て京都菴文堂より頒つこゝまゝなつて居る。「那波」

●銅鐸の研究(資料編)

梅原 末治著

本邦の金石並用時代の遺物として特殊の文化的所産すべき銅鐸の問題は多年、斯學者によりて其の解決に努力されつゝあるが今日尙ほ定説として充分に満足すべきものに接しない。著者またこの究明に努むるこゝ多年、其の解決の基本をなすべきものは考古學的調査の基礎に立つべきものであるとし、即ち資料の蒐集を第一とし次で考證に移らんとし茲に銅鐸個々の出土状態、形状、文様、化學成分等の特徴を考査し、從來發見せられてゐる凡てを網羅し資料編として提供せられたるものである。

著者は次いで考證編を近き將來に提出せらるべきものであるが、今まこの資料編の完成を見たこゝは實に本邦銅鐸の大蒐成録として斯界の爲に感謝すべきこゝである。四六倍版本本文の四百頁、圖版約百五十葉を二卷に包括してゐる吾人は著者及び斯學者により從來究明の容易でなかつた銅鐸に對して、最も合理的なる解釋の下さるゝ日の近きにあらんこゝを喜ぶものである。(東京市外大岡山書店發行、價三〇、〇〇)(島田)

●日本上代文化の考察

中村久四郎著
森本 六爾著

その内容は之を分ちて前編後編の二部にする事が出来る。其前編は大部分新に執筆されたもので、「上代日本人の櫛」の三編より成るが、その第一は先づ古墳發見の櫛を包含せる古墳並びに伴出物を附記し、埴輪土偶の櫛を觀察し、更に記紀の文獻を涉獵して以て次の「考察」の前提をなし、「考察」の項には、種々の點に就て獨自の見解を披瀝して居るが、就中、吾人の注意を惹いたのは古代の櫛の中には梳るこゝいふ意味よりも寧ろ留めるこゝ

ふ事の役立ちが強かつたと言へる事、上代人が櫛に一種の不思議な力を認めその力によりて悪魔を拂ふものさ考へたらうとする點及び古墳から發見する豎型の彎曲結齒式の櫛をもつて外大陸の影響を受けた、めに外觀が挽齒式に近似しながらも日本人によりて製作された、めに其材料其方法に幼稚な技術が認め得るをせる點であらう。

次に簪に就ても、その出土の實例を擧げたる後考察を加へ、大體に就て大陸の系統を引いたものであるが、中には支那あたりから既成品を輸入したのももあり、それが更に日本に於て特別な發達をしたものもあらうとした點や、結髮形式の差異によりて、形式の異つた釵子が發生し得るのであるから、各種の形式のものが同時代に共存し得たらうとする點が、著者の苦心した結論である。

其後編は「原始繪畫を有する彌生式土器」「甕棺に關する一考察」「前方後圓墳の外形の起原」「墳墓遺物の示現する奈良時代文化の一面」の四小編より成るが、それは何れも嘗て發表されたものであるけれども、「日本上代文化の考察」に役立つものとして吾人の看過する事の出來

ないものである。(菊版二五八頁、挿入圖五十四、東京四海書房發行、價二、七〇)(中村)

●兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告

第四輯

兵庫縣發行

大正十五年度に調査せられたる兵庫縣下の主要なる史蹟七所、名勝一所、天然記念物十一所を包括せるものであつて、史蹟としては淡路ミ西宮に於ける人形操の調査武庫郡菟原の處女塚、有馬郡湯泉神社並蒲涼院、美濃郡弘計億計二玉隠接傳説、加古郡八幡村の調子塚古墳、揖保郡鶴庄及斑鳩寺、三原郡千光寺を記述してゐる。就中吉井太郎氏の同地方特殊の淡路操人形の考證は衰滅に近づくかゝる郷土藝術についての貴い記録である。處女塚の土俗的説話の如き此の種の乾燥なる記述に對し又興味ある新分野の研究を云へる。其他寺社の考證は魚澄惣五郎、中村直勝氏等の執筆にかゝり、文獻と相まちて論考されてゐる。(四六版、本文一〇〇頁圖版二八葉、非賣品)

●山高郷土史研究會考古學研究報告書

山口高等學校歴史教室發行